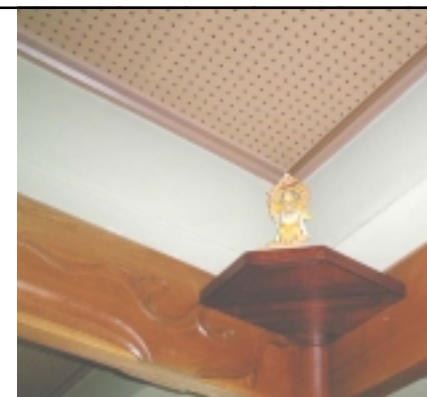


KOURIN



写真は持国天
寄進者 皆 トミ殿



本堂内陣の阿弥陀様を守護する四天王が、祀られました。阿弥陀様のおられる須弥山（しゅみせん）の四方を持国天、増長天、廣目天、多聞天がお守りします。



だるまさん

年間法要の法話、念佛講、14日会等に参加された方に渡しています。100だるま以上集められた方には無条件で、お戒名に院号をお贈りします。お札に名前を書いて保管しておいて下さい。

国際協力事業団（JICA）への協力

使用済のプリペイドカード(テレフォンカード、ハイウェイカードなど)がありましたら、お寺へ御持参下さい。(JICA)を通じて世界中の子供達の医薬品や医療器具などを購入する資金を得るための活動に役立てていただきます。



香林山 冷智院 無量寺

機関紙 **こうりん**

平成16年3月1日 第33号

〒830-0044 福岡県久留米市本町8-4
TEL 0942(32)3010 FAX 0942(32)2701
ホームページ URL <http://www.muryoji.net>
E-mail info@muryoji.net
郵便振替口座 01750-7-16114

内容

- ・お釈迦様最後の旅
- ・彼岸会（ひがんえ）
- ・彼岸法要案内
- ・五重相伝のすすめ
- ・つもりちがい十力条
- ・つくってみよう 精進料理
- ・お知らせとお願い

挨拶

住職 堤 俊翁

三月になりましたが、今日は雪がちらつく寒空です。イラクでは、戦争開始以来最大のテロが起きて、多数の人が亡くなりました。イスラム教の会派の違いによるものが大きいようですが、争いは争いしか生まないということを私達に示してくれているようです。人を幸福にする法があるのに、それを実践することの難しさ、人間の愚かさを見せられる思いです。法ひとりひろまらず、人を待ってひろまる。自分自身にできることを考えましょう。

高いつもりで低いのが教養
 低いつもりで高いのが気位
 深いつもりで浅いのが知識
 浅いつもりで深いのが欲望
 厚いつもりで薄いのが人情
 薄いつもりで厚いのが面の皮
 強いつもりで弱いのが根性
 弱いつもりで強いのが自我
 多いつもりで少ないのが分別
 少ないつもりで多いのが無駄

つもりちがい十か条

作ってみよう精進料理

《ぶど》



〔浄土宗かるな〕より

材 料

ぶど	400g
だし汁	同量
細ねぎ	1束
みそ	大さじ1杯
椿油	大さじ1杯
みりん	大さじ1杯

作り方

ぶどは丁寧にゴミを取り除き、水洗いする。鍋にぶどとだし汁を入れ火にかける。アク汁を取りながら柔らかくなるまで煮る。調味料を入れ、最後にみじん切したねぎを入れて火を止める。型に入れて冷し固める。

涅槃会（ねはんえ）

お釈迦様がなくなられた日 2月15日

80歳で最後の旅路、クシナガラへ

歳を取るにつれて、お釈迦さまは、しだいに肉体の衰えを感じはじめ、横になることが多くなりました。コーサラ国の瑠璃王によって滅ばされ、教団内でも、信頼をおいていた舍利弗、目蓮という十大弟子のうちの二人が相次いで亡くなるなど、つらいことが続いていました。

こうしたことで生きる意欲が減退してきたお釈迦さまは、ついに入滅の決意を固められます。そして入滅の場所としてクシナガラを選ぶと、侍者として阿難(あなん)ひとりを連れ、最後の旅に出たのである。齢80歳、さとりを開いてから45年後でありました。

高齢の体に鞭打つてのつらい旅であったと思われま。ようやくクシナガラにたどり着くと、お釈迦さまは二本のサーラ樹を選び、その間に床を用意させました。そして北側へ頭を置き、右側を下にして横になると、足と足を重ねられました。このときサーラ樹は、季節ならぬ花を咲かせお釈迦さまを迎えたといひます。

お釈迦さまの入滅に近い

ことを知った出家修行者や在家の信者は、続々とサーラ樹のもとへ集まってきました。さらに、鳥や獣、目に



は見えない諸天諸神までもが詰めかけ、釈迦の周囲を埋め尽くしていったといわれています。お釈迦さまは、最期の言葉を発すると、やがて禅定(ぜんじょう)「瞑想」に入り、そのまま静かに入滅されたのであります。

釈迦の最後の言葉は

お釈迦さまが阿難をはじめ、集まった人々にいったのは、「この世はすべて無常である。比丘(びく)よ、そなたたちは、怠ることなく努力するように」ということばでした。「自燈明・法燈明」お釈迦さまが入滅する直前、お釈迦様の死後の事を不安に思う信者に対して行った最後の説法の内容。「自分自身を頼り(燈明)としなさい。そして、私を頼りにするのではなく、私の説いた法を頼りと

しなさい」とお釈迦さまは最期に言われました。信頼すべきは釈尊自身ではなく、「法」であるという宗教家として在るべき姿がここにありま。

世界各地に分骨された釈迦の遺骨

お釈迦さまは亡くなったあと、クシナガラで火葬されました。その遺骨は部族や王によって八つに分けられ、それを祀るストゥーバ(塔)が各地に建てられたと伝えられています。また、玄奘三蔵の記した「大唐西域記」によれば、アショカ王が八つのうちの七つのストゥーバからお釈迦さまの遺骨を集めて、あらたに分骨して八万四千のストゥーバを建てたと伝えられています。

お彼岸 極楽浄土への道

お浄土へ思いをよせ、ご先祖から伝えられた「命」の尊さをかみしめましょう。お彼岸がやってきます。仏道実践週間ともいわれるこのお彼岸を好機に、お念仏生活へ一歩を歩みだしましょう。

お彼岸を迎えるにあたって「暑さ寒さも彼岸まで」といいますが、お彼岸は春夏秋冬の四季にめぐまれた日本独特の仏教行事です。

私たちはこの仏教行事をとおして季節の移ろいをも感じとっています。お彼岸につきものの春の「ぼたもち(牡丹餅)」、秋の「おはぎ(御萩)」などもその表れといえるでしょう。

しかし、この彼岸は季節を表す言葉ではありません。

私たちは日ごろ、「あの世、この世」という言葉を使います。「この世」はもちろん私たちの生きている現実世界であり、「此岸(しがん)」です。

此岸は(1)煩悩渦巻く(2)「四苦八苦」の世界です。限りある苦悩の世界をいとい離れて求められるのが、「あの世」すなわち「彼岸」なのです。

彼岸は限りない命と智慧に満ちあふれた世界です。阿弥陀さまの浄土、西方極楽浄土こそが、私たちの願い求めゆくべき彼岸なのです。

彼岸という仏教行事をとおして私たちは、今を生きるこの私の命がご先祖から永々と伝えられて来た「命のバトン」を受けて生きているという事実を再確認し、彼岸にいらっしゃるご先祖をしのぶとともに、この私も命おえる時には彼岸での(3)「俱会一处(くえいっしょ)」を願い求め、「四苦八苦」の世界に埋没することなく精進してまいりますという心を堅固にすることが大切なのです。

彼岸への一筋の道

ここで、中国の高僧善導大師が説かれた「二河白道(にがびやくどう)」のお話をご紹介します。彼岸と此岸との対応が明確にあらわされています。

一人の旅人が、東から西への旅路を歩いています。突然前方に河があらわれました。立ち止まって後を振り返ると、盗賊や猛獣・毒蛇が襲いかかってきます。

旅人は河の間に小さく細い白道を見つけました。しかし白道の左の方には猛火が燃えさかり、右手は急流が押し寄せてきます。進む

平成16年3月1日も死、戻るも死と、全くの絶望状態です。旅人は躊躇していました。すると、迷っている旅人の耳に、東の岸から声が聞こえて来ました。

「決心してその白道を歩みなさい。死ぬようなことはありません。そこにとどまっていたら死ぬでしょう」と、そしてさらに進もうとする西の岸からも、それに呼応するように「心から信じてすぐこちらに来なさい。私があなただけを守ってあげよう。水の河、火の河を恐れることはありません」という声が響いてきました。

その声に励まされて前進する旅人ですが、背後から盗賊や猛獣・毒蛇の音が。「早く引き返さなさい、その道は通れない、行けば死ぬだけだ。我々はあなたを殺したりはしない、引き返さなさい」旅人はその誘惑に乗ることなく白道を進み、ついに向こうの岸に到達することが出来たのです。

賢明な読者の皆さんはお気づきのことと思います。

東岸は娑婆、西岸はお浄土です。盗賊や猛獣・毒蛇は私たちの心に住む煩悩を、火の河は怒りの心、水の河は貪りの心を意味しています。白道は彼岸に到ろうとする清浄な心、東岸の声の主はお釈迦さま、西岸からのそれは阿弥陀さまの呼び声なのです。



はじめての五重相伝

平成16年4月20日から24日までの5日間、無量寺では浄土宗に伝わる五重相伝会を開きます。

これはこの紙面に連載してきましたように大変有意義な(檀信徒のみなさまの為の)修養会です。

人間としてこの世に生まれてきたことの本当の意味を考えていただく為に、また、今、生かされていることの幸せを実感していただく為に行います。

日頃から先祖様の御回向を通して感謝の気持ちをもって過ごされていることとは思いますが、今一度、無量寺の本堂の御本尊様(阿弥陀如来様)のみ前で集中してお話を聴き、お釈迦さま以来面々として続く浄土宗のお念佛の教えを受けて頂きたいと思えます。

5日間時間をあけてお通い頂くのは大変だと思います。仕事や家庭のことなかなか

ままならないことがあるでしょう。御家族や職場の皆様の御協力が必要になってくることでもあります。

しかし、1度きりしかないこの世の人生で尊い佛縁に出会っていただくことは、大変意義あることと思えます。

海外旅行に出かけたと思えば、あるいは体調を調べるために検査入院をすれば、5日間の時間を開ける事はそう難しいことではないでしょう。

最近、巷では、葬式をどのような形でしてほしいのか?あるいはお骨をどのように祭ってもらおうか、散骨がいい、自然葬がいい、など死後のことを話題にできるような環境も整いつつあります。

私達僧侶からこれをみていますとある面では自己満足の域をでないのではないのか?

あるいは社会情勢、家族問題の波を受けて、その人らしい個性と良いながら実は世の風潮に流されているのではないのか?と思える事もあります。

大事なことは、頂きたいのちを生ききって、後生に伝えることのできるものとはいったい何なのか?

それを探る手がかりを五重相伝会で見つけていただきたいものです。



五重相伝を修了された方には上の様な巻物をお授けします。これは生涯大切にしてください。滅後はお棺に入れてお送りします。

ほんとうに生きるとはどういうことなのか?

5日間のこの修養会で気付かせていただくことができるようになれば幸甚に存じます。

お一人でも多くの方がこの佛縁に会われる事を祈念しております。

現在あと10名ほどの方にお申し込みいただける状況です。

より多くの機会をもちたいとは思いますが、お寺にとりましても多くの準備が必要です。10年から15年おきに開いてまいりました法会です。皆様もお体の楽な内に参加される方がよいと思えます。

彼岸法要のご案内

檀信徒各位

聖名、日一日と暖かな陽射しの今日この頃となりました。

皆様にはご健勝の事とお慶び申し上げます。

平成16年に入りまして、早3月の声をきき、恒例の春のお彼岸を迎える時期となりました。

就きましては下記のように春季彼岸法要を厳修いたしますので、ご多忙の処とは存じますが、お繰り合わせご参詣下さいますようご案内申し上げます。合 掌

平成16年3月

無量寺住職 堤 俊翁 拝

日時 3月20日(土)(春分の日)

午後1時よりご回向、引き続き説教

布教師 筑後市林鐘院 三宅 明信 上人

ご回向料 1霊につき 金1,000円以上ご志納下さい

お供米またはお供え米料

人生けるときはげみなければ、たとえば草樹の根なきが如し。花を採りて日盛りに置かんに、能くばく時か鮮やかなることを得ん。人の生命も亦かくの如し。うつりかわりはたちまちのあいだなり。もろもろの道をおさむる人々にすすむ、勤め修めてすなわち真に至りたまへ。(善導大師「往生礼讃」)

お彼岸の由来

さて、私たちが春秋を迎えるお彼岸は、それぞれ春分、秋分の日を中日としての一週間をいい、日本独特の行事です。そしてこのような形態で行われるようになったのは聖徳太子の時代からといわれています。平安時代初期から朝廷で行われ、江戸時代に年中行事化されたという歴史があります。

さらにその根拠を尋ねてみますと、前述の二河白道を説かれた(4)善導大師の著書(5)『観経疏(かんぎょうしょ)』の(6)「日想観」が源となっています。

善導大師は春分、秋分の日、太陽が真東から昇り、真西に沈むところから、その陽の沈みゆく西方の彼方にある極楽浄土に思いを凝らすのに適していると説かれました。

お彼岸はこの日想観を行って極楽浄土を慕うことを起源とした仏事なのです。

皆さんも、是非このお彼岸には実践してみてください。ピルの谷間に沈みゆく太陽であろうとも、その彼方には極楽浄土があるのです。

お念仏で彼岸へ渡ろう

私たちが求め慕う彼岸、極楽浄土にはどうすれば到達することができるのでしょうか。

煩悩の水火渦巻く私たちにあっての「白道」とは何でしょうか。

阿弥陀さまは、私たちのように自らの力で煩悩を断ち切れぬ凡夫に救いの手をさしのべる本願を選びとってくださいています。お念仏のみ教えこそが、私たちにあっての「白道」なのです。

お念仏の生活を日々送ることが、彼岸への道を歩むことなのです。

私たちには煩悩の荒波を鎮めたり、猛火を消し止めて彼岸へ到達することはできません。阿弥陀さまの本願の船に乗って彼の岸へ渡らせていただくのが唯一の道なのです。

お念仏の心構え

私たちの彼岸へのよりどころであるお念仏、どのような心でお称えすればよいのでしょうか。究極には法然上人のお言葉「智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし」につきますのですが、お念仏を称える心のありかたとして説かれている「三心」についてふれてみましょう。

その第一は「至誠心(しじょうしん)」です。「至というは真なり、誠というは実なり」というように真実の心、内面にも外面にも嘘偽りがなくありのままの飾ることのない心を「至誠心」といいます。次に「深心(じんしん)」が挙げられています。「深心

とは、すなわちふかく信ずるところなり」なのです。何を深く信じるのかということですが、二つあります。「信機」し「信法」です。

「はじめにはわが身の程を信じ、のちに仏の願を信ずるなり」のお言葉があります。

信機はまさに「身の程」を知ることです。「なすべきことをなさず、すべきでないことをしてしまう自己に気付く」ということでしょうか。

そんな私をも、阿弥陀さまはお救いくださるのだ、お念仏を称えて、阿弥陀さまの本願力に乗じて必ず往生するぞ、と信ずる心を信法というのです。

三番目は「回向発願心(えこうほつがんしん)」です。これは、私たちが前世から今に至るまでなしてきた、あるいはこれからなす全ての善い行いの功德を振り向けて極楽往生、彼岸への到達を願う心をいいます。

このように三心を述べてみるとそれぞれ別個のもののように思われますが、「極楽往生を願う心に嘘偽りがなく、心底往生をしたいと思うのであれば、三心は自然にそなわってくる」と法然上人はおっしゃっています。

このお彼岸を好機として、彼岸への思いを深め、そこへの歩みを踏み出したいものです。